

令和8年度青森県立保健大学

一般選抜前期日程

栄養学科

小論文試験問題

10:00～11:30 (90分)

〈注意事項〉

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 2 この問題冊子には、問題用紙が4ページあります。
- 3 落丁・乱丁がある場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
- 4 解答用紙には、下記の記入例により **あなたの名字の頭2文字及び受験番号を忘れず**に記入してください。
- 5 問題冊子及び下書用紙は持ち帰ってください。

〈解答用紙への記入例〉

(例1)

頭2文字	ス	ズ	(鈴木:スズキ)
------	---	---	----------

(例2)

頭2文字	ザ	イ	(財前:ザイゼン)
------	---	---	-----------

(例3)

頭2文字	キ	ッ	(吉川:キッカワ)
------	---	---	-----------

受験番号	4	1	1	0	0	1
------	---	---	---	---	---	---

問題 I 次の英文を読んで、後の問に日本語で答えなさい。（*には注釈があります。）

著作権上の理由により、引用部分を非掲載としています

- | | | | |
|-----------------|------------------------------------|-------------------|---------------|
| * bacteria | バクテリア, 細菌 | * gut | 消化管 |
| * microbiota | 細菌叢 (細菌の集まり, 塊) | * trillion | 兆 |
| * immune system | 免疫系 | * bowel | 腸 |
| * inflammation | 炎症 | * kefir | ケフィア (発酵乳の一種) |
| * ferment | 発酵する | | |
| * sauerkraut | ザワークラウト (キャベツを塩漬けにして乳酸発酵させたドイツの漬物) | | |
| * thrive | 繁殖する | * digestive tract | 消化管 |
| * whole grains | 全粒穀物 | * adequate | 十分な |
| * bulk | 容積 | * stool | 便 |
| * intestine | 腸 | * soluble | 溶ける |

* cereal シリアル

* barley 大麦

* oatmeal オートミール

* over-the-counter 市販の

* capsule カプセル

* chewable tablets チュアブル錠（口の中でかみ砕いて服用する錠剤）

問1 プロバイオティクス（**probiotics**）とプレバイオティクス（**prebiotics**）のそれぞれの機能について、本文の内容を踏まえ、100字以上120字以内で説明しなさい。

問2 本文では、プロバイオティクス・プレバイオティクスを含む食品や食物繊維の重要性が説明されている。

将来、あなたは管理栄養士として、消化器の不調に悩む人にどのような指導を行うか。本文の内容を踏まえ、あなたの考えを280字以上350字以内で述べなさい。

問題Ⅱ 栄養学の創始者である佐伯矩^{たかす}博士について記述された次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（*には注釈があります。）

大正三（1914）年に、矩はそれまでの準備期間ののち「栄養研究所」を芝区白金三光町に開設しました。目的とするところは「栄養の綜*合的研究」と、それに基づく「栄養学の独立」でした。

（中略）

大正七（1918）年、矩は「栄養専門語」を創作しました。学問には、それに用いる学術用語がなければなりません。矩が創った語は、次のようなもので、今日は学術用語としてばかりでなく辞書、百科全書などに載せられ、また日常語として一般に用いられるものとなりました。

①矩は、まず文部省に国定教科書中の「營養」および内閣印刷局の官報、広報に使われていた「營養」を「栄養」に改訂するよう建言しました。その後、北京大学の胡春林教授が昭和四年に国立栄養研究所へ来所された時、矩が「營」の字を「栄」に変えた事に賛成され、中国においても日本が自然科学の術語として「營」という字を書いていたのでそのまま使われたが、しかし、学問上、「栄」の字の方が正しい意味をもつとの見解を示されました。

（中略）

学問には、初めから実践の目的をもつ、いわゆる実学とか応用学とかいわれるものがあり、栄養学も、その範疇に属するものであると思っている人があるかもしれません。

しかし、矩は「栄養学」は純正科学の立場をとるものと考えており、私にもたびたびそれをいっています。

「栄養学の目的は、まず『何が栄養であるか』を純正科学の立場でとらえる。それから、それでは生体にとってどんな状態がよりよいか、またそれをもたらす方法を研究する。そのうえに実践活動が存在する。決してその裏返しではない。たとえば、ここに栄養素の欠乏があったとすれば、それを突きとめ、それを与えるのは応用と実践の部分ではあるが、純正科学の立場が前提としていつでも忘れられてはならない」

（中略）

要するに、矩の本領は研究者であり、実践活動は「何を、いかなる方法で、いつ」食べさせるかを、栄養学的にはっきり定め、あとはそれを実践出来るような技術、方法を決定するか、それを実践するに当たって必ず「指導」によるか、の二つに分かれますが、それらの標準を確立することになりました。

その意味で、「栄養改善」と呼ばれた実践活動、ことに初期のものは、国立栄養研究所のフィールド・ワークとして行われた研究活動としての面が強く出ています。

（出典：佐伯芳子『栄養学者佐伯矩伝』玄同社、1986年、p.19-40より抜粋。ただし、出題の都合上、縦書きの原文を横書きにし、文章の一部を省略・改変している。）

* 綜 「総」の旧字体

問1 下線部①のように佐伯博士が建言した理由について、本文の内容を踏まえ、70字以上100字以内で説明しなさい。

問2 栄養学における研究と実践活動の関係について、本文の内容を踏まえて説明しなさい。さらに、管理栄養士として実践活動にどのように取り組んでいきたいか、あなたの考えを220字以上280字以内で説明しなさい。